

2024年5月

「コリীগ」57号 目次

巻頭言（1～3）『アジア太平洋地域高等教育学会（Higher Education Research Association, HERA 2023）』開催報告（3）全国大学教育研究センター等協議会開催報告（4）第51回研究員集会開催報告（5）国際セミナー開催報告（7）APIKS 2024『Changes in the Academic Profession in the Knowledge-Based Society and International Comparison』開催報告（8）寄付プレートの設置について（9）2023年度の公開研究会（10）センター往来（11）新任者・離任者から一言（12）情報調査室だより（19）

巻頭言



官製大学改革のゆくえ： 「エポケー」（判断停止）の必要性

藤村 正司

（徳島文理大学人間生活学部・教授）

RIHEを2年前に卒業し、業界から離れたので『コリীগ』の巻頭言を依頼されるとは夢にも思わず、元教員として「持ち駒」がなくなったのかと案じた。自由に書いて下さいと言われるとかえって困るのだが、初めて学校法人という民間組織で体験した一年と止まらない入学者減を重ねて、閉塞感漂う官製大学改革のゆくえを考えてみた。

徳島文理大学赴任当初、学科の学生数が上級学年ほど多いのが不思議で、学科長に「留年生が溜まっているのですか」と聞くと、「そうではなく、近年急に志願者が急減している」と。しかし、考えてみると、大都市圏の私立大学に対する定員規制が地方私学の定員割れを抑制するはずではなかったのか。2020年度に、少子化対策で始まった「高等教育の修学支援新制度」（授業料等減免と給付型奨学金の受給）が低所得層の大学進学を底上げしたはずでは？同制度は2024年の改正で、支援対象を中所得層まで引き上げ、多子世帯や授業料の高い理系志望者まで支援を拡大するはずである。受験人口は大きく変わらないにもかかわらず、わが社の入学者が近年急減するのはなぜか？新型コロナウイルス感染の恐れが遠のいて自宅外通学が増えたのだろうか。

周知の通り、高校生の進学移動は転出超過になっている。東京都の大学収容力が令和4年現在で20万3千人、全国の大学収容力63万人の3割を超えるためである（千葉、埼玉、神奈川を加えると43%）。東京一極集中だから、地方の人口は放っておくと自然減になる。そうならないように、大都市圏私学の厳格な定員規制が行われた。だが、少なくとも定員規制によるトリクルダウンは四国まで及んでいない。低中所得層の底上げをねらった修学支援

No. **57**

新制度は、自宅通学よりも自宅外進学希望者の背中を押した可能性がある。短大・短期大学の志願者減も、修学支援新制度が女子高生の四大志望を強めたためかもしれない。

いずれにせよ、政策とは裏腹に底知れない志願者減と推薦入試や総合型選抜を通じた弱肉強食の世界に直面して、地方私学のレジリエンスが試されている。だが、やがてキャンパスが閑散としてくれば、若い教職員にとって将来が不安にならないはずがない。そのこともあってか、若手よりも定年退職者や修学支援新制度の機関要件に適う実務家教員を雇用する慣行ができています。しかし、そのことが研究者として安定的なポジションを求める博士人材の就職難に繋がっていると見て良い。

こうして、私立大学は、教員の高齢化による活力低下と定員の縮小均衡による人件費の高騰抑制が喫緊の経営課題になっている。遠からず、国立大学もその道を辿るのであろう。否、すでに医学・教育学部以外でも入試制度で地元就職することを条件に「地域枠」を設ける学部が増えている。国立大学でも定員割れが現実味を帯びてきているのである。

ところで、私学助成も定員規制も十分でなかった1960年代に、定員を大幅に超えて入学させる私立大学をメディアは「水増し入学」だと報じた。これに対して、日大トップの古田会頭は「ニクらしいことばだね。水増しとは。」「あれ（大学設置基準）は“教育定員”であって“経営定員”ではない。私大が守れるはずがないじゃないか。」と応酬したと言う（山崎政人『自民党と教育政策』岩波新書、1986年、70-71頁、（ ）内は筆者）。当時240万人の団塊世代は、孫世代になると120万人に半減し、2022年生まれはとうとう77万人となった。令和4年現在の入学定員は627,160人（私立498,140人）。令和5年の高卒現役志願者589,321人、過年次志願者を含めると635,619人。川嶋太津夫氏（大阪大学）が第50回研究員集会で指摘されたように、日本の大学は「リアル」志願者全入時代に突入している。

「リアル」志願者全入時代の大学は、自己肯定感が低く、言語化の苦手なZ世代の受け皿になる。私立大学は学校推薦や総合型選抜を利用する大半の生徒を受け入れて、彼・彼女らの夢（大学に行って生まれ変わりたい）を叶えさせるため、一年次から資格取得に向けて教育し、各種採用試験や国家試験で結果を出さなければならない。

某学科長曰く、「上のランクの大学が定員を割り始め、これまで取らなかった学生まで入学させてきている。だから、私たちは「意欲がないか」、「能力がないか」、「心が病んでいるか」、そうした子を取り込んで、保護者と手を携えながら彼・彼女らをそれなりに成長させていくしか手がない。それも大きな社会的意義があると信じている」と。

今や私立大学では、否、東京大学でも「学生ファースト」が営業方針である。義務教育段階では不登校児童生徒を救済する「義務教育確保法」が成立した。大学でも不登校ならぬ中途退学の増加は、本人の将来のためにも経営的にも見逃すことはできない。最高学府の「小」学校化と揶揄されようとも、問題を抱えた学生を早期発見してケアしていかないと大学の経営は成り立たない時代になっているのである。

では、「高等教育のグランドデザイン」（2018年）が描く2040年の適正規模はどうなるのか。18歳人口が77万人に減少する2040年に、2022年現在の入学定員63万人を満たそうとすれば、大学進学率は「グランドデザイン」が予想した7割を越えて81.4%まで上昇しないといけない。しかし、授業料をタダにしても機会費用がある。いつの時代でも進学意欲の全くない高校生がいる。

そこで、大学進学率70%を想定すると8万8千人、60%では16万5千人の余剰定員が生まれる。入学定員500人の小規模私学が前者で176校、後者で330校が淘汰されることになる。大学は社会人や留学生を受け入れていかねばならない。ところが、政府は財産所有者として権限をフルに発揮して私立大学の淘汰に先手を打っている。「修学支援新制度」に課した機関要件がそうである。

機関要件の妥当性は大学団体の異議申し立てにより見直されたから蒸し返さないが、そもそも定員充足率や就職率は地域の労働市場や人口減に関わることなので個々の大学ではどうしようもない。学生を保護するというのは、“お為ごかし”で、機関要件の厳格化によって私学の経常費補助を削減する意図が透けて見える。令和5年12月1日現在で「修学支援新制度」の対象から外れた大学・短大は少ないが、やがて機関要件をクリアできない大学が続出してこよう。

こうして市場を規制するのが政府の役割なのに、NPM (New Public Management) に従う官製大学改革は市場に加担して競争を組織することで、私学の定員割れを意図的に作り出し、地方から若者を消失させようとしている。なので、東京一極集中は止まらない。私学助成の効率化だけではない。政府は国立大学を法人化することで大学内部にヒエラルキーを導入し、学長のリーダーシップを通じて政府の意図を組織の末端まで貫徹させることに成功した。実際、政府は運営費交付金を定率削減し、競争的資金に付け替えた。法人化第三期からは、交付金の一部を機能強化経費として一端控除し、成果連動型評価に基づいて再配分した通りである。

結果として、学長は元気づいたが、肝心の現場は疲弊した。10兆円規模の官製の大学ファンド運用益から巨額の支援を受ける国際卓越研究大学制度とその一翼を担う「J-PEAKS」は、金銭と引き換えに地方大学を「優良大学」として飼いならすことに成功した。しかし、いずれも機関単位の採択なので、非採択大学の専門分野の特色が葬られてしまっている。

重要なことは、1990年代から30年にも及ぶ、すそ野を減じて「選択と集中」を導入すれば成果が上がるのだという官製（慣性）大学改革には、エポケー（判断停止）が必要だということである。政策の成果が常に精査・検証されてきたわけではない。その際、高等教育研究の役割は、「転ばぬ先の杖」であり、「蜂の一刺し」でなければならぬと思うが、その批判的精神は人口減と財政難の時代で挫けたようにも思う。

『アジア太平洋地域高等教育学会 (Higher Education Research Association, HERA 2023)』開催報告

黄 福涛

(広島大学高等教育研究開発センター教授)

6月13日から14日にかけて、広島大学学士会館と高等教育研究開発センターで、広島大学高等教育研究開発センター主催のアジア太平洋地域高等教育学会 (Higher Education Research Association, HERA 2023) が開催されました。会議のテーマは、「変化するグローバル情勢下での高等教育：課題と展望 (Higher Education in a Changing Global Landscape: Challenges and Prospects)」で、会場での対面形式とオンラインのハイブリッド形式で開催されました。参加者は、アメリカ、イギリス、インドネシア、オーストラリア、韓国、台湾、中国（香港含む）、チリ、フィンランド、ポーランド、マレーシアおよび日本（当センター教員の大膳、黄、櫻井、金、李、及び大学院生数名を含む）から136名の発表者（うち、7か国より会場での発表者は76名、12か国よりオンライン発表者は60名）が出席しました。また、会場での一般参加者は7名、オンラインでの一般参加者は77名でした。

アジア太平洋地域高等教育学会 (HERA) による国際会議はこれまで広島 (2014)、ソウル (2014)、台湾 (2015)、香港 (2016)、北京 (2017)、クアラルンプール (2018)、オンライン (2021・2022) での8回にわたって開催されてきました。これらの会議では、アジアおよび他の大陸の高等教育の課題や将来についての議論が行われました。特に、研究大学の育成、ガバナンスとアカデミック文化、高等教育政策と財政、高等教育の平等、雇用可能性、流動、変化するアジア高等教育、ポストコロナ時代におけるマス高等教育などが取り上げられました。

今回のHERA2023国際会議は、アジアおよび他の大陸の高等教育が直面している一般的な課題、今後直面するであろう課題、新しい文脈におけるアジアおよび他の大陸の高等教育の将来について調査することを目的とし、主にアジア諸国の研究者を招き、世界、地域、国、機関レベルでの高等教育の問題を分析し、議論しました。アジアや他の大陸の高等教育の将来を様々なレベルで正確に予測することは

不可能ですが、高等教育の将来に関するいくつかのトレンドが取り扱われ、検討されることが期待されました。

この会議では、まず本学の鈴木由美子理事・副学長から開会挨拶があり、その後、本学の副学長であり弊センター長の小林信一教授が、当該センターの歴史を簡単に紹介した上で、この会議を開催することの重要性を説明しました。基調講演では、本学の名誉教授であり弊センターの元センター長（第8代および10代）の有本章教授が「日本の大学における大学教授職」について、中国清華大学の文雯准教授が「大学のあり方」、韓国ソウル国立大学の Jung Cheol Shin 教授が「高等教育が直面する新たな課題」、香港大学の Gerard Postiglione 教授が「中国の高等教育におけるリベラルアーツの制度化」について発表されました。

また、香港、米国、台湾、ポーランドからの参加者による4つの特別講演があり、香港教育大学の Bruce Macfarlane 教授からは「アカデミック・パトロネージとジャーナル特集」、アメリカ・カリフォルニア大学の Tongshan Chang 教授からは「カリフォルニア大学システムオフィスにおける機関研究」、台湾淡江大学の Dian-Fu Chang 教授とアメリカ・サンノゼ州立大学の Angel Chang 博士からは「大学生の起業」、ポーランドのポズナン大学の Marek Kwiek 教授からは「変化するグローバルなアカデミック・プロフェッション定量化研究」といったテーマが取り上げられました。さらに、中国や、日本、韓国、香港、台湾、インドネシアなどの国々の研究者から「高等教育制度と政策」、「高等教育の国際化」、「高等教育のガバナンス」、「大学教授職」、「大学生」、「比較高等教育」、「中国の高等教育」、「台湾の高等教育」などの主題を中心に、4つのパネルセッションや20以上のパラレルセッションが設けられました。

今回の国際会議を通じて、アジアおよび他の大陸の高等教育の問題や動向、将来についての議論が行われました。グローバルな高等教育の変化や最新動向を把握し、時代の変化に応じて高等教育の様々な側面を再構築する必要性が再確認されました。

次回の HERA 国際会議は、2024年6月5～6日に台湾の台北市で開催される予定です。



全国大学教育研究センター等協議会開催報告

大膳 司

(広島大学高等教育研究開発センター教授)

8月24日(木)・25日(金)の2日間にわたって全国大学教育研究センター等協議会をハイブリッド開催しました。

全体テーマは「大学における人材育成と地域共創—その現状と課題—」として、人材育成における地域共創をどのように考えるとよいのか、今後の人材を育成するうえで、大学にはどのような役割が期待

されているのか、どのような課題があるのか、について情報交換し、今後の Society5.0を担う人材育成の方向性や内容について検討することを目的として本年度の協議会を開催しました。

初日は、新潟大学人文社会科学系・経済学系列（創生学部）の堀籠崇先生に、「大学における人材育成と地域共創」をテーマとして基調講演をいただきました。その詳細は、News Letter No. 26の巻頭に掲載しましたのでご覧ください。基調講演に続いて、富山大学、金沢大学、三重大学、長崎大学における地域共創の事例を報告いただきました。

2日目は、「テーマ3：有効なオンライン授業の方法」「テーマ4：文理融合による教育の意義」「テーマ5：教育の質とは何かー大学は何を保証しなければならないのか?」「テーマ6：自律的学習者を育てるための学習支援の方法・担

い手・組織体制」「テーマ7：生成 AI の教育への展開の利点と課題」の5つのテーマ別にグループ討論を実施しました。これらテーマ別での討論内容のまとめを以下に報告してもらいました。

VUCA 時代の高等教育のありかたを考える上で、地域とどのように共創していくかは重要な課題ではあるが、その成果が十分に表れてはいない、ということはこの大会を通して確認することができました。成功事例を重ねながら、地域共創が根付いていくことを期待しています。

なお、当日の成果については、News Letter No. 26 (<https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2024/03/News-Letter-No.26.pdf>) をご覧ください。



第51回研究員集会開催報告

野内 玲

(広島大学高等教育研究開発センター准教授)

第51回研究員集会は2023年11月17日に「高等教育学の専門分野が推進すべき研究公正の取り組みの探索」と題してハイブリッド形式で開催されました。ここでの研究公正は、研究者として他の研究者・社会に対する責任を意識して研究を誠実に実施するための規範的考え方のことです。この概念は、文部科学省や研究費助成機関から要請される教育研修や届出などを代表に、大学の中で日常的に目にするものが多くなってきています。それではこれらにまつわる各種の対応について、まさしく大学の中で起きていることを研究対象として扱う高等教育学ではどのような取り組みを行なっていて、何をしていくべきなのでしょう。

研究公正は、学生への指導や外部講師による定期的な講習会、eラーニングによる各自のトレーニング、さらにはコンプライアンスの一環としての位置付けの中で、この数年、大学の中に根付いてきているものと思われます。そのため、教育内容という側面やそうした教育を大学内で実施していくための方法の理解がまず重要になります。それと同時に、これまで慣習的に「研究公正」と呼ばれてきた研究者

の規範的考え方を拡張した、新たな「研究インテグリティ」概念に関する管理運営的側面（諸外国との共同研究等の実施の際に注意すべき客観性・透明性の確保に関するあり方）も検討する必要があります。こうした昨今の状況を踏まえ、高等教育学分野から研究公正の今後の推進に関する議論への積極的関与がもたらされることを期待して、今回の会合が設定されました。

会合は基調講演（総論）と情報提供（各論）とで構成されました。まず基調講演では、広島大学高等教育研究開発センターの野内玲、早稲田大学の札幌順先生、東北大学の佐々木孝彦先生からそれぞれ、研究公正と高等教育学分野との接点、研究公正のトレーニングを推進するための志向倫理的観点、研究インテグリティという昨今の課題に関する組織的な取り組みについて発表がありました。

その後の情報提供では、研究公正に関するより具体的な授業実践等の報告として、筑波大学の岡林浩嗣先生、名古屋大学の齋藤芳子先生からご所属の大学院等で実施した具体的な講義の様子や受講者からのフィードバックについてお話いただきました。また信州大学の樋笠知恵先生からは、岡林先生・齋藤先生の情報提供に対し、研究公正について省庁等が実施した調査の知見を踏まえた総合的意見をおまとめいただきました。

ディスカッションではご登壇者の先生方の発表では説明されていなかった観点についても意見が提示され、それに対する応答の中でさらに研究公正に関する理解を掘り下げていく熱心な議論ができたように思います。最後は高等教育研究開発センター長の小林信一先生より閉会の挨拶として各登壇者のご発表内容への感想が述べられました。

お忙しい中、お集まりいただいた参加者の皆様には厚く御礼を申し上げます。また、本集会の開催にあたってご支援を賜った IDE 大学協会中国・四国支部（共催）、一般財団法人公正研究推進協会（後援）の関係者の皆様にも重ねて御礼を申し上げます。第51回研究員集会の記録は高等教育研究開発センターが発行している『高等教育研究叢書』のシリーズとして刊行されます。高等教育と研究公正の新たな道を検討するために、ぜひお手にとっていただけますと幸いです。



研究員集会の様子

国際セミナー開催報告

金 良善

(広島大学高等教育研究開発センター准教授)

2023年11月22日と23日に RIHE 主催の国際セミナーが開催されました。

このセミナーは、東アジアで活躍する多様な文化背景をもつ学者間の議論を深めることを目的として、「Diverse academics in the East Asian context: Their experiences and challenges / 東アジア諸国で活躍する多様な研究者たち：経験と挑戦」というテーマで行われました。

1日目は、東アジアで活躍中の若手・女性あるいは国際的に多様な文化背景をもつ研究者たちが日本、韓国、香港、台湾から集まり、それぞれが担う役割や挑戦、課題などについて情報共有し、議論を深めました。とりわけジュニアレベルの講演者たちは、自らがどのように学界に参画し、個人レベルから政策レベルまで、競争環境下で求められる挑戦にのぞみ、キャリアを構築しているかについて語り合いました。

2日目には、博士課程大学院生によるプレゼンテーションやワークショップも開催されました。

このセミナーは、東アジア諸国の博士号取得候補者同士の出会いの場を提供し、研究やキャリアを進める上で直面している課題や問題に関して深く議論するための研究ネットワークの構築に貢献しました。

両日間の国際セミナーを通じて若手研究者と博士課程大学院生が参加交流することで、彼らが直面してきた経験と課題を踏まえ、今後より包括的でダイナミックな学術文化をいかに発展させてゆくべきかを共に模索する良い契機とすることができました。



講演内容および発表者詳細は以下の通りです。

11月22日

- Beneficiaries of reverse discrimination or marginalized minorities? Diverse perspectives on international academics in Korean universities *Inyoung Song (Korea University) & Yangson Kim (Hiroshima University)*
- Supporting academic women's careers: Views of male and female academics at a Chinese research university *Li Tang (University of Hong Kong)*
- Where is our way? A collaborative autoethnography of academic career strategizing of Chinese female PhD students in Hong Kong, Korea, and Japan *Xin Li (Hiroshima University)*
- The impact of Taiwan's national teaching practice research program on higher education academic profession *Hung-Chang Chen (National Taiwan Normal University)*
- Differentiation of academic career paths: What questions do Japanese academic staff raise? *Machi Sato (Kyoto University)*

11月23日

- Navigating complexity: The application of agent-based modeling in research on internationalization of higher education *Kaixiang Kang (Hiroshima University)*
- A systematic literature review of the impact of performance-based research funding *Sujin Kim (Seoul National University)*
- Examining the Teaching-Research Nexus Among Taiwanese Academics: An Institutional Perspective *Shutzu Wang (University of Taipei)*
- 'I am not a traditional Chinese learner': Understanding transformative learning and identity changes of students in transnational higher education *Mei Lai (The University of Hong Kong)*
- The determinants of Japanese-trained Chinese Ph.Ds' academic-career attainments *Shuoyang Meng (University of Tokyo)*
- Situated learning in Japanese Kenkyūshitsu and its underlying philosophy *Mako Kawano (Kyoto University)*

APIKS2024 『Changes in the Academic Profession in the Knowledge-Based Society and International Comparison』開催報告

黄 福涛

(広島大学高等教育研究開発センター教授)

2024年2月3日から4日にかけて、広島大学高等教育研究開発センターで開催された国際会議「Changes in the Academic Profession in the Knowledge-Based Society and International Comparison」では、30以上の国からの研究チームが参加している『知識基盤社会における大学教授職』(Academic Profession in the Knowledge-Based Society, APIKS) という国際共同研究プロジェクトの一環として、主に国際比較的アプローチに基づいて、知識基盤社会における大学教授職の変化に焦点を当て、アジア、ヨーロッパ、北米、南米の大学教授職における様々な側面について分析・討論が行われました。具体的には、アジア、ヨーロッパ、北米、南米などの地域で、日本、フィンランド、オーストリア、カナダ、ドイツ、ポルトガル、マレーシア、トルコ、アルゼンチン、チリ、中国、台湾、韓国などの国々が対象となります。また2日間にわたる会議では、約49名の講演者が対面またはオンラインでプレゼンテーションを行いました。

大会の初日、2月3日のセッション1では、本学の副学長であり弊センター長の小林信一教授による開会の辞がありました。その後、本学の名誉教授であり弊センターの元センター長（第8代および10代）の有本教授による基調講演「知識ベース社会における大学教授職の国際比較研究」が行われました。有本教授は、中世の大学と近代の大学が知識に対処してきた歴史的な観察を通じて、科学的知識の重要性が増していると述べ、学問の威信が大学内外で確立されるべきであり、学問のプロフェッショナルが知識ベース社会で価値のある R-T-S ネクサス (Research-Teaching-Society Nexus) を実現するべきだと強調しました。

続いてのセッション2では、フィンランド、オーストリア、カナダ、バルカン、バルト諸国における大学教授職の変遷に焦点を当てたプレゼンテーションが行われました。例えば、フィンランド・ラップランド大学の Timo AARREVAARA 氏による「キャンパスの変化、永続的な教員？」では、キャンパスでの仕事とキャリアの変遷について調査結果が提示され、オーストリア・クレムス継続教育大学の Attila PAUSITS 氏による「オーストリアの大学教授職における構造化された博士課程の影響」では、

構造化された博士課程が大学教授職に与える影響が探究されました。

昼食休憩を挟んでの午後のセッション3では、ポルトガルとリトアニアでの女性の大学教授職における影響に焦点を当てた研究や、マレーシアにおける大学教授職の仕事量と仕事満足度の変化に関する研究が発表されました。セッション4では、大学教授職を焦点とする新しい国際共同研究プロジェクトについての議論が招待参加者によって行われました。

2日目のセッション5では、ラテンアメリカ、中国、台湾の大学教授職の役割と影響に焦点が当てられました。関係者の皆さんから、ラテンアメリカの視点から大学教授職の知識社会への関与や大学の“第三の使命”についての見解、チリにおける男女別のアカデミアでの状況に関する APIKS 調査の結果、そして、APIKS 調査から得た大学教授職の社会的関与に関する洞察が報告されました。

昼食休憩後の午後のセッション6と7では、韓国や日本、トルコなどでの大学教授職のコミットメント、職業満足度、研究パフォーマンスなどに関する研究が行われ、各国の大学教授職が直面している課題や変化が共有されました。最終的なセッション8では、今後の国際共同研究プロジェクトについての議論が行われ、最終的な総括と閉会の辞が Ulrich TEICHLER 教授と有本章教授によって行われました。

この国際会議では、大学教授職の変遷や課題に関する幅広い視点からの研究が発表され、異なる国々や地域での大学教授職の共通点と相違点についての理解が深まりました。また、知識基盤社会における大学教授職の将来に向けた展望や国際的な共同研究プロジェクトの実施についても議論が行われ、多岐にわたる知見が共有されました。



寄付プレートの設置について

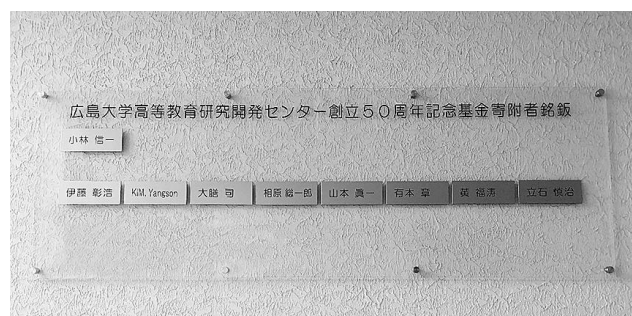
大膳 司

(広島大学高等教育研究開発センター教授)

当センター50周年記念行事の一環として、皆様から寄付を募りました。

募集全期間を通じて、2,195,000円の寄付が集まりました。

特に、10万円以上の高額寄付をしていただいた皆様には、感謝の念を込めて、右記の通り名前入りの銀色の寄付プレートを作成しました。50万円以上の寄付者は、金プレートとさせてい



ただきました。

2024年3月をもって、50周年記念事業としての寄付活動は終了とさせていただきます。皆様のご支援に深く感謝申し上げます。また、2024年度から寄付金を有効に使わせていただきたいと思いますと考えております。

2023年度の公開研究会

*肩書は当時のもの（敬称略）

	講 師	テ ー マ
第1回 (2023/6/20)	三宅 隆悟（内閣府） 高橋 功（内閣府） 山下 恭範（京都大学）	経済安全保障と大学
第2回 (2023/7/5)	康 凱翔（広島大学） 樊 怡舟（広島大学）	高等教育研究資源ナショナルセンター企画 社会科学における「マイクロ→マクロ」問題－方法論の視座から－
第3回 (2023/9/14)	陳 祖恩（上海社会科学院／東華大学）	国際交流史に位置づけた教育と文化－戦前上海における日本人の社会体験
第4回 (2023/11/20)	中谷圭太郎（パリ・サクレ大学高等師範学校）	パリ・サクレ大学の設立 新組織、新大学都市の構成
第5回 (2023/12/15)	堀川 優弥（東京大学）	国際共同研究推進事業 令和5年度採択者による公開研究会 / 高等教育研究資源ナショナルセンター企画 大学職員はなぜ自発的に行動できていないのか－プロアクティブ行動の観点から－
第6回 (2024/2/7)	岡本 紗知（大阪大学） 小泉かさね（大阪大学） 河野 真子（京都大学）	理系研究室コミュニティにおける学生の能力開発とアイデンティティ
第7回 (2024/2/22)	Ariunaa, ENKHTUR（大阪大学） Mahboubeh, RAKHSHANDEHROO（関西学院大学）	Social space perspectives in exploring SDGs curricula localization: Case study at two Japanese national and private universities
第8回 (2024/3/1)	Paul, UMBACH（ノース・カロライナ州立大学）	アメリカ大学教員の仕事とキャリアの最近の変容
第9回 (2024/3/18)	浜田 宏（東北大学）	数理モデルを通して社会を「説明」する

センター往来【2023年4月～2024年3月】

*所属は当時のもの（敬称略）

<2023年>

- 4月 川村 和弘（北九州市立大学）中島 秀人（東京工業大学名誉教授）細野 光章（東海国立大学機構岐阜大学）池田宗太郎（文科省）
- 5月 白井 俊行（内閣府）Neha（所属なし）
- 6月 三宅 隆悟・高橋 功（内閣府）山下 恭範（京都大学）何 京玉（青島大学）
- 7月 小竹 雅子（島根大学）木村 拓也（九州大学）
- 8月 藤村 正司（徳島文理大学）佐藤 郁哉（同志社大学）羽田 貴史（東北大学・広島大学名誉教授）
- 9月 田中 秀明（明治大学）上原 秀一（宇都宮大学）大津 尚志（武庫川女子大学）松原 勝敏（高松大学）赤星まゆみ（西九州大学）阿部 弘（東京国際フランス学園）シルヴァ, ソニア（東京都立大学）川端 映美（大阪大学）細尾 萌子（立命館大学）横関 木蘭（青山学院大学）陳 祖恩（上海社会科学院／東華大学）小島みなみ（みずほフィナンシャルグループ）
- 10月 なし
- 11月 研究員集会招聘者〔札野 順（早稲田大学）佐々木孝彦（東北大学）小竹 雅子（島根大学）岡林 浩嗣（筑波大学）齋藤 芳子（名古屋大学）樋笠 知恵（信州大学）〕中谷圭太郎（パリ・サクレ高等師範学校）RIHE 国際セミナー招聘者〔宋 仁英（高麗大学校）唐 麗・頼 媚（香港大学）陳 宏彰（国立台湾師範大学）佐藤 万知（京都大学）金 秀眞（ソウル大学）王 淑慈（台北大学）孟 碩洋（東京大学）河野 真子（京都大学）〕杉本 和弘（東北大学）杉谷 祐美子（青山学院大学）武藤 浩子（早稲田大学）譚 君怡（国立臺中教育大學）John Douglass（カリフォルニア大学バークレー校）原山 優子（特定非営利活動法人（NPO 法人）日本科学振興協会／東北大学名誉教授）
- 12月 原田健太郎（島根大学）布施真奈美（アジア科学教育経済発展機構）袁 通衢・服部 憲児（京都大学）堀川 優弥（東京大学）Kriti Goel（所属なし）

<2024年>

- 1月 細野 光章（東海国立大学機構岐阜大学）井上美香子（福岡女学院）
- 2月 APIKS2024招聘者〔有本 章（広島大学名誉教授）中尾 走（広島市立大学）佐藤 万知（京都大学）Attila, PAUSITS（クレムス継続教育大学）Glen, JONES（トロント大学）Wenqin, SHEN（北京大学）Timo, AARREVAARA（ラップランド大学）Liudvika, LEIŠYTĖ（ドルトムント工科大学）Ulrich, TEICHLER（カッセル大学）Soo Jeung, LEE（世宗大学校）Doria, ABDULLAH（マレーシア工科大学）Norzaini, AZMAN（マレーシア国民大学）Teresa, CARVALHO（アヴェイロ大学）Sophia Shi-Huei, HO（台北市立大学）〕岡本 紗知（大阪大学）高木 航平（東京大学）Ariunaa, ENKHTUR（大阪大学）
- 3月 Paul, UMBACH（ノースカロライナ州立大学）賈 立男（北海道大学）

新任者・離任者から一言

2024年度客員研究員



岡山 茂 (おかやま しげる)
元早稲田大学 政治経済学術院教授

わたしは19世紀のフランス文学、そのなかでもステファヌ・マラルメの研究が専門ですが、クセジュ文庫の『大学の歴史』(クリストフ・シャルル, ジャック・ヴェルジェ著)を翻訳したころから、大学の歴史と大学論に関心をもつようになりました。『ハムレットの大学』(新評論, 2014)は、文学と大学を歴史の展望のなかで一つの視野に収めようとしたものです。また『大学事典』(平凡社, 2018)では事典の編集に加わるとともに、5つの大項目(「フランスの大学」、「学生」、「大学と教養」、「大学と平等」、「大学と契約」)他を執筆しました。日仏教育学会と大学評価学会に所属し、フランスと日本の高等教育の歴史を、ボードレールやフロバール以降の近代文学との関係からとらえなおす研究を続けています。



川越 明日香 (かわごえ あすか)
熊本大学大学教育統括管理運営機構
准教授

この度は、貴センターの客員研究員の機会をいただきありがとうございます。

私は大学における「学生の学びと成長」をテーマに、教育方法や教育評価の研究をしています。学生は大学入学後、4年間のたくさんの学びや経験を経て、卒業していくわけですが、入学前、卒業後も見据えた上での大学教育はいかにあるべきか、またそれをどのように組織的にデザインし、マネジメントするかを中心に考えています。

RIHEは、私が大学院博士課程後期を過ごした古巣です。この場で改めて客員研究員として身を置けることに感謝しつつ、多くの皆様との交流を通して、自分自身の研究と教育実践の視野を広げていきたいです。また、微力ながらセンターの活動に貢献できるよう努めて参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。



児島 功和(こじま よしかず)
パーソル総合研究所研究員

伝統ある高等教育研究開発センターの客員研究員の機会を与您にいただき、大変光栄に存じます。2023年4月よりパーソル総合研究所研究員として仕事をしていますが、それまでは約15年間大学教員として仕事をしました。大学教員時代は、若者の学校(特に大学)から職業世界への移行に関する調査や大学教職員を対象とした調査を行ないました。民間企業に移り、それまでとは異なる研究テーマに挑戦していますが、「大学と社会の接続関係」への関心は続いています。貴センターは重要な研究コミュニティであると考えています。そのコミュニティのなかで、多様な背景をもつみなさまと一緒に議論できればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



小竹 雅子(こたけ まさこ)
島根大学学術研究院教育研究推進学系
(オープンイノベーション推進本部担当) 助教

この度は、広島大学高等教育研究開発センター(RIHE)の客員研究員の機会をいただき、誠にありがとうございます。RIHEは、私が大学院生時代に大変お世話になった、今の私の原点のような場所ですので、このような形で再びRIHEの一員となることができ、大変光栄に思っております。私は、大学を取り巻く様々な環境変化に対して、組織としての大学や教員個人がどう対応しているのかに関心を持ち、研究を進めています。大学における教育研究環境の劣化が指摘される中で、大学の現場に活力を取り戻すために何をなすべきか、という問題意識のもとで研究に取り組んでいます。任期中に具体的な研究成果を出せるよう精進してまいります。ご指導をよろしくお願いいたします。



白鳥 義彦(しらとり よしひこ)
神戸大学大学院人文学研究科教授

この度は貴センターの客員研究員の機会をいただき、ありがとうございます。私のバックグラウンドは社会学で、フランス

でデュルケームが社会学という新たな学問を制度化する過程に興味を持つなかで、その背景に普仏戦争敗北後の当時のフランスにおける大学改革があったことを知り、高等教育という研究対象に興味を持つようになりました。その後、一世紀以上前のフランスのこのことのみならず、日仏を中心に現代の諸問題にも関心を寄せてきています。4月より所属大学で研究科長・学部長となる予定なので、センターでの研究活動を通じて得た知見を生かして、日々の現実を学問的に相対化しながら俯瞰的にとらえていきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



竹下 知成(たけした ともなり)

早稲田アカデミックソリューション社会連携企画部アソシエイトコンサルタント

この度貴センター客員研究員を拝命し、誠に光栄に存じます。私は博士号取得後2022年に入社し、現在は主にプレ・ポストアワード支援、早稲田大学におけるアントレプレナーシップ教育の運営事務局等を中心に担当しております。入社以降「起業」「スタートアップ」に関する業務を担当する中で、大学におけるそれらの意義、また課題等を実感することが多くございました。今回の機会を活かし、研究成果の社会実装に資する知見を創出すること、そして得られた知見を大学関連会社の在り方やサービスへ昇華させることを目指したいと考えております。ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



出口 英樹(でぐち ひでき)

鹿児島大学高等教育研究開発センター 准教授

鹿児島大学の出口と申します。このたび貴センター客員研究員を拝命いたしました。このような機会を与えていただき、多変光栄に存じます。

私は1998年に大学院に入学し、その年の5月に広島大学において開催された日本高等教育学会第1回大会に参加いたしました。貴センターとはそれ以来のお付き合いであり、微力ながらその活動の一端を担えることを大変嬉しく思います。

私の研究は産学官連携を志向する大学の組織分析に始まり、専門職養成とその制度、大学設置者の多様化と法人性、高等教育としての地域連携教育のあり方などを扱って参りました。最近は高等教育研究における理論と実践の架橋にも関心がご

ざいます。

貴センターでの活動を通じて、少しでも高等教育研究の発展に寄与できれば幸いです。どうぞよろしくお願ひします。



中谷圭太郎(なかたに けいたろう)

パリ・サクレ高等師範学校教授

この度は RIHE の客員研究員の機会をいただき、高等教育研究は素人の私には大変光栄です。日本生まれですが、フランスで教育を受けて、今に至っています。専門は化学で、自分自身の研究において、国際共同研究や学生交流を積極的に進めています。また、ガバナンスに関わる役や管理職を務めた経験もあります。その一環で日本を含む他国の方々と高等教育・研究の世界について意見交換などの機会をいただいているうち、それに関わる、元の専門外の課題に興味が湧いてきました。現在、我が校で Research-Based Learning の WG に参加、また高等教育・研究システム、研究者の育成・キャリア、国際交流などの国際比較に興味を持っています。貴センターご所属でフランス研究の専門家の大場淳先生にお会いしたことをきっかけに、高等教育研究の世界有数のセンターで、プロの先生方、多方面の方々と接し、勉強させていただき、様々なテーマに取り組めること、そして私もお役に立てば、と期待しております。どうぞよろしくお願ひ致します。



藤井 基貴(ふじい もとき)

静岡大学教育学部准教授 / 国際連携推進機構・副機構長 / 現代教育研究センターセンター長

この度、貴センターの客員研究員を拝命しました。貴重な機会をいただき誠にありがとうございます。前職は名古屋大学高等教育研究センターにて FD / SD に取り組み、2008年4月より現職に就きました。専門は教育学(教育哲学・教育史)です。2010年代には文科省・中央教育審議会の専門委員として教員養成制度の改革に関わり、あわせて研究倫理や研究公正に関わる調査研究に参加する機会をいただきました。近年では大学の国際化や国際教育分野における「第三領域」の職能研究にも関心を持っております。みなさまとの情報・意見交換を通して、高等教育研究の発展と学生たちの未来に貢献できればと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。



堀籠 崇 (ほりごめ たかし)
新潟大学人文社会科学系・経済学系列
(創生学部) 准教授

この度、広島大学高等教育研究開発センターの客員研究員を拝命いたしました。私はこれまで、医療経営学・地域経営学の視角から、医療、福祉や介護、在宅も含めた様々な機能を繋ぎ、地域で丸ごと住民の健康で安全な暮らしを支援する仕組みづくりに関する研究に従事して参りました。8年前に全国に先駆けて誕生した文理融合型の学部に着任し、文理の垣根を越えた様々な分野の専任教員と協働で学部教育に取り組む中で、学際教育のあり方や、分野を横断した地域共創の仕組みを支えるグローバル人材の育成などについても関心が広がりました。是非、貴センターの皆様との交流を通じて、これからの時代を見据えた大学における人材育成の課題や可能性について共に考えていけたらと考えております。ご指導ご鞭撻の程何卒よろしくお願いいたします。



増田 泰啓 (ますだ やすひろ)
早稲田アカデミックソリューション
マーケティング室コンサルタント

この度は客員研究員の機会をいただきありがとうございます。現在、大学関連会社で、大学訪問等による大学とのネットワークの構築、また、全国の大学職員と先進的な事例を共有するセミナーの開催に携わっております。専門分野は語学教育とグローバル人材育成です。昨今、大学には一層の国際化が求められる一方で、業務の専門化・高度化が進んでおり、業務を外部委託することによってより優れた成果がもたらされることが増えてきました。RIHEでの研究を通じて、大学国際化やグローバル人材育成における課題を分析し、外部委託が適切な業務を見極め、ソリューションを見出すことで高等教育機関の発展に寄与したいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



渡部 芳栄 (わたなべ よしえい)
岩手県立大学高等教育推進センター/
教学 IR センター教授

RIHEの客員研究員の機会を頂き、光栄に存じます。RIHEには2008年度から3年間、文科省の委託事業に従事する研究員としてお世話になりました。現在は公立大学におり、評価・FD・

基盤教育(共通教育)の企画・地域志向教育・データサイエンス教育などに携わっていますが、最近では慣れないPythonを使って本学独自のIRシステムづくりに勤しんでいます。これらの業務はいわゆる大教センター系が主に担っているように思いますが、公立大学のセンター系の横のつながりは強いとは言えません。RIHEや全国大学教育研究センター等協議会の知見やつながりを生かして、今後の枠組みについて考えていければと思います。ご指導のほど、よろしくお願いいたします。

※その他、信州大学の廣内大輔准教授(2015-19)に客員研究員にご就任いただきました。再任のためご紹介を省略いたします。

2024年度学内研究員



ADILIN ANUARDI
(アディリン アヌアルディ)
情報メディア教育研究センター准教授

この度は、学内研究員という貴重な機会をいただき、誠にありがとうございます。

私は2022年に情報メディア教育研究センター次世代オンライン教育研究部門の准教授として広島大学に着任しました。これまで、オンライン教育の戦略立案、eラーニングコンテンツの開発支援、LMSの運営、オンライン教育に関する研究などに携わってきました。現在、私は生体情報について研究を行っており、オンライン学習や学習支援ツールなどへの応用を目指しております。まだまだ未熟ですが、RIHEの皆様から様々なことを学び、次世代のために教育システムを改善できるよう尽力します。ご指導のほどどうぞよろしくお願い致します。



梅下健一郎 (うめした けんいちろう)
国際室国際部留学交流グループリーダー

SGU(スーパーグローバル大学創生支援事業)を担当しております。SGUを推進するにあたり、高教研との関連が結構ござ

います。

例えば、世界的な学生調査コンソーシアムである「SERU学生調査」に本学が参加したことも高教研の先生方にアドバイスいただいたことがきっかけでしたし、その後のSERU学生調査における分析や学内外への周知についてもご活躍いただきました。

また、SGUの取組みについても、『高等教育研究叢書』にSGU特集号として2度（137号、155号）掲載していただくなど深く関連があると思っています。

このたび、高教研の学内研究員として要請をいただいたことについて、上記のとおり縁を感じているところです。

力不足ではありますが、お受けさせていただきました。いろいろとご指導いただけると幸いです。



日下部達哉（くさかべ たつや）
IDEC 国際連携機構：CICE 教授

この度は、学内研究員の仲間に加えていただきまして、ありがとうございます。私は、バンラデシュをはじめとする南アジア諸国の教育に関心を持ち、1999年から研究を進めてまいりました。当時、トレンドだった初等教育開発を研究対象としており、高等教育研究はなんとなく縁遠い存在でした。しかし年を追うごとに、同国の研究トレンドは中等教育、高等教育へと移り、現在バンラデシュでは、私立大学の設立が相次いでいます。RIHEの先生方と議論しても面白いのではないかという局面に來た気がしています。また、存亡の危機が何度も訪れたCICEの教員としては、RIHEのことを勝手に「同志」と思ってきました。お互い潰されぬよう、これからも研究の“新商品”を生み出していきたいですね。



竹内 哲弘（たけうち てつひろ）
総合戦略室総合戦略室長

この度は、学内研究員の機会をいただき、誠にありがとうございます。2003年以来2回目の就任となります。当時は、目前に国立大学法人化を控え、経営感覚を備え、企画立案ができる大学職員となり、大学運営に参画していくためには何が必要なのかという課題について、企画室専門職員という立場で勉強させていただきました。

その後、国立大学法人は、指定国立大学法人や国際卓越研究大学、成果を中心とする実績状況に基づく配分によるグルーピング化などに対応してきましたが、今後も大学改革の名の下に、様々な制度改革が行われると思われます。

RIHEの皆様からご意見をいただきながら、今後の大学運営と大学職員のあるべき姿について考えていきたいと思っております。よろしく願います。



徳光祐二郎（とくみつ ゆうじろう）
学術・社会連携室未来共創科学研究本部研究戦略部
研究戦略推進部門リサーチ・アドミニストレーター

このたびは学内研究員の機会をいただき、誠にありがとうございます。2014年にリサーチ・アドミニストレーター（URA）として広島大学に着任し、現在はプレアワード支援や国際連携推進等を担当しています。広島大学のURAは、平成25年の文部科学省「研究大学強化促進事業」を機に導入されましたが、その制度化や人材育成等でRIHEの先生方には多大なご尽力を賜りました。今回少しでも恩返しさせていただく機会と捉え、たいへん微力ですが、RIHEが推進している高等教育研究や国際的ネットワークづくりを、URAの立場から少しでもお手伝いできればと思っております。どうぞよろしく願います。



中島健一郎（なかしま けんいちろう）
人間社会科学研究科教授

2024年4月より客員研究員にお招きいただき、ありがとうございます。広島大学人間社会科学研究科・教育学部の中島健一郎と申します。専門は社会心理学・教育心理学で、主に対人関係をキーワードとした研究プロジェクトをすすめています。総合科学部・総合科学研究科の頃は学生として「研究とは何か」を学び、前任校（長崎女子短期大学）では、同僚の先生方と学生とのかかわりの中で「教育とは何か」を学びました。いまはその経験を活かしながら、本学での研究と教育に努めています。時代や環境が変わり、学生も変わっていく中で何かと大変なことはありますが、それでもやりがいを感じる事ができる毎日に感謝しております。これからみなさまとご一緒できることを嬉しく思っております。どうぞよろしく願います。



牧 貴愛（まき たかよし）
人間社会科学研究科准教授

私は国際教育開発プログラムに所属し、比較教育学の分野で、とくに教師教育に関心があります。最近では、タイの研究者と防災教育の教員研修コンテンツの共同開発、南アフリカの研究者とICT活用指導力を備えた教員の養成・研修の比較研究、東南アジア大陸国のへき地・小規模校の教師教育、東南アジアとアフリカ

諸国の教師教育者 (teacher educators) の専門性開発の比較研究やウェビナーの定期開催などに取り組んでいます。この他、タイをフィールドとして大学入学者選抜の制度改革と公正性、タイ高専をはじめとする産業人材育成などの調査研究にも取り組んでいます。本学のタイの大学との学生交流・研修のお手伝いの機会を頂いておりますので、研究と教育活動の双方で、微力を尽くすことができればと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

※その他、人間社会科学研究科の衛藤吉則教授 (2013-17)、中矢礼美教授 (2012-16) にも学内研究員にご就任いただきました。再任のためご紹介を省略いたします。

修了生



胡 靖宜 (こ せいぎ)

博士課程前期修了 (2024年3月)

日本での生活と学びのこの2年間で、私は多くの貴重な経験を積みました。日本での生活の過程で、日本の風俗や文化を深く理解し、物事を観察に新しい視点を得ました。研究の面では、これらの2年間の学びが、研究者としての考え方と方法を徐々に身につけさせました。社会と人間性についてより深い理解を得ることができました。広島大学とセンターの指導と育成に感謝します。母国に帰っても、この忘れられない日本留学経験を永遠に心に留めています。



蔡 媛 (さい えん)

博士課程前期修了 (2024年3月)

過去三年間、私は2021年からRIHEで充実した時間を過ごしてきました。この期間中、私は専門的な知識を磨き、自分に満足のいく研究成果を出すことができました。この成果は私一人の努力によるものではありません。主指導教官の村澤先生、副指導教官の小林先生、そしてゼミの先輩方の絶え間ないサポートと指導の賜物です。また、同期の友人たちには、異国での生活が順調に運ぶように日常生活面で大変お世話になりました。彼らの支援と友情に心から感謝しています。今後、RIHEで培った能力を生かし、自分の希望するキャリアパスを追求し、将来の人生で新たな探求を続けていきたいと思っております。これまでの経験は、私の今後の道りに大きな影響

を与え、成功への礎を築きました。改めてRIHEの皆様から感謝を申し上げます。



秦 藝臻 (しん げいしん)

博士課程前期修了 (2024年3月)

この二年間の学習を通じて、大きな成長と学びを得ることができました。RIHEでは、専門知識の習得だけでなく、問題解決能力や研究スキルの向上も身につけました。また、同じ志を持つ仲間との交流や指導教員からの助言は、学術的な道を支えてくれました。今後は、これまでの経験を職場で活かし、高等教育事業の発展でさらに深く貢献していきたいと考えています。



曾 敏 (そう びん)

博士課程前期修了 (2024年3月)

2022年からRIHEで留学生としてお世話になることになりました。初めは、未知や不安を感じるが多かったですが、先生方や先輩方のあたたかいサポートのおかげで、日本での留学生活に段々と慣れていくことができました。この2年間、「社会公平感への認識差異」の研究に取り組み、金先生をはじめ、黄先生、中矢先生などの先生方のご指導のもと、多くのことを学ぶことができました。

また、初めてマレーシアで行われた国際学会に発表者として参加できたことも光栄に思います。

最後に、熱心に指導してくださった先生方や、同じく学ぶ仲間の皆さんに恵まれたことを心から感謝しております。4月からの社会人としての新しい生活を迎えるにあたり、RIHEで学んだ知識や経験を活かしていきたいと思っております。



張 雅琪 (ちょう がき)

博士課程前期修了 (2024年3月)

RIHEでの2年間は思ったよりも早く過ぎました。2年前に留学を申し込んだ時はちょうどコロナが最も深刻な時期であり、様々な困難や不安を感じました。当時の自分は、今のように興味のある分野で研究を進め、日本での就職も成功させることができるとは思っていなかったでしょう。大学院への進学は人生における重要なターニングポイントであり、視野が広がることでさらに広い世界を探索する勇気がわいてきました。RIHEで受けた授業はすべて面白く、

学問に深い魅力を感じました。これから社会人になっても、怠らずに学び続けたいと思います。学生時代の最後を広くで過ごし、RIHEで過ごしたことは本当に良かったです。



坪根 栄俊 (つぼね ひでとし)

博士課程前期修了 (2024年3月)

コロナ禍が始まった2020年度より、長期履修制度を利用し、学修に取り組みました。大場先生には日頃から親身なご指導を頂き、副指導の黄先生、大膳先生、堀田先生、藤村先生 (2021年度迄) からも温かいご指導を頂きました。また、社会人学生として円滑に学修できたのは、センター長の小林先生や大学院進学を目指す際にお世話になった村澤先生をはじめとした教職員の方々のご配慮の賜物です。さらに、毎週のゼミでは、日本各地の大学等で活躍されているゼミ生の方々より貴重なご助言を頂きました。調査研究においては、鈴木理事長並びに松田前学長、大塚学長をはじめとした学校法人福山大学並びに福山大学の方々から、惜しみのないご支援とご理解を賜りました。最後に、家族の協力がなければ大学院進学は叶わないことでした。修了後は、皆様から頂いたご厚意を胸に刻み、福山大学の大学職員として精進してまいります。



莫 晟 (ばく せい)

博士課程前期修了 (2024年3月)

これまでの学びと経験に感謝の意を表します。RIHEでは、研究を通じて自己成長を遂げ、新たな視点や知識を得ることができました。日本での生活は挑戦的でありながらも、豊かな文化や人々との交流から多くを学びました。修了後は、学んだ知識を活かし、実社会での課題解決に貢献したいと考えています。研究分野においてもさらなる深化を図り、社会に新たな価値を提供していくことを目指しています。



松宮 慎治 (まつみや しんじ)

博士課程後期修了 (2024年3月)

大学院進学を考えていた私がはじめてRIHEにお邪魔したのは、2014年2月のことでした。大場先生のゼミを見学させていただいたのち、村澤先生と渡邊先生から入学試験の説明を頂戴しました。元体育会系の浅はかな(?) 思考から、弱い自分をまずは外部環境によ

て律するべく、2019年末までは神戸から毎週のように西条に通い、中村屋でお好み焼きを食べました。そこまでしてもなお結果が出ず、苦しい時期もありましたが、先生方のご指導、職員の皆様のご支援、先輩、同級生、後輩のお力添えで修了できました。賜ったご恩のすべてに報いることは到底できそうもありませんが、これからの結果で少しずつお返ししたいと思います。10年間ありがとうございました。

新入生



齊 洋 (せい よう)

博士課程前期入学 (2024年4月)
※研究生 (2023年10月入学) より進学

はじめまして、2024年4月より博士前期課程に進学した齊洋と申します。2022年に大学の単位交換制度を利用して日本にきました。2023年10月に研究生として入学してから、吉田先生をはじめ、RIHEでの諸先生方、先輩方、事務室の皆様大変お世話になり、心から感謝申し上げます。この半年間の研究生活は非常に楽しいものでした。また、高等教育学に関する知識も身に付けました。

現在は、「中国における農村留守児童の大学進学率に関する研究」をテーマとして研究したいと考えています。留守児童の進学率の低さの原因を明らかにし、彼らの生活や精神面に関する理解を深める手助けになると 생각합니다。

これから、2年間の修士生活が始まります。日本に来てから、この日が来ることをずっと待ち望んでいました。今後は、さらに多くの知識を学び、論文の執筆に取り組んでいきます。何卒よろしくお願いたします。



周 宜澄 (しゅう ぎちょう)

博士課程前期入学 (2024年4月)
※研究生 (2023年10月入学) より進学

私は中国江蘇省出身の周宜澄と申します。東南大学の日本語学科を卒業し、4月から広島大学高等教育研究開発センターの大学院生として学びます。

大学時代から、高等教育という領域、特に高等教育の国際化に関する課題に関心があります。今後の研究テーマについては、ポストコロナ時代における日本と中国の大学が展開する国際交流プログラムを焦点に、文献調査と関係者に対するイン

タビューを通じて、プログラムの実施状況と変化を検討したいです。

これから2年間の修士課程で、RIHEで高等教育における様々な課題についてさらに知識を学び、コースワークの中で研究を行う能力を身につけるよう頑張ります。

どうぞよろしく願いいたします。



梁 志桜 (れおん ちおん)

博士課程後期入学 (2024年4月)
※研究生 (2023年10月入学) より進学

この度はたくさんのサポートをいただき、博士課程後期に進学させていただきありがとうございます。

ございます。

私の専門は高等教育政策と国際化で、学生の国際的な学習経験を向上させて、国際的な連携をコーディネートすることを巡って、研究を進めたいです。

これからは、RIHEの一員として、先生方と大学院生の皆さんと一緒に、素晴らしい旅を始めることを期待しております。どうぞよろしく願いいたします。

研究生



王 婧玲 (おう せいれい)

(2024年4月入学)

はじめまして、2024年4月に研究生として入学した王婧玲と申します。大学卒業後に留学を考えていましたが、新型コロナの影響で計画が中断されました。その後、3年ほど仕事をしてきましたが、防疫政策の緩和に伴い、再び留学への希望が湧いてきました。

元々異文化交流に強い興味を持っており、卒業後は国際企業で勤務していました。その経験をきっかけに、グローバル人材育成や国際的な知識交流に関心を抱くようになり、「日本における外国人研究者が所属機関の国際化への評価について」という研究計画書を策定しました。

RIHEで教職員の皆様や先輩の皆様と一緒に学生生活を送れることを心待ちにしています。どうぞよろしく願いいたします。

情報調査室だより

2023年8月に

RIHE出版物サイト・情報調査室ページ等の URLが変わりました！！

お気に入りやブックマークなどに登録されている方は、お手数ですが新アドレスへの変更をお願いいたします。



RIHE出版物サイト

<https://rihe-publications.hiroshima-u.ac.jp/>

情報調査室ページ

<https://rihe-publications.hiroshima-u.ac.jp/rihe-library/>

RIHE出版物サイト 『大学論集』ページのURL変更について



サーバ移行に伴い、下記サイトの
第1集～41集の各論文のURLが変わりました。

 [論文一覧ページ](https://rihe-publications.hiroshima-u.ac.jp/ronshu/ronshu2/) 

論文名・著者名を1集から最新集までスクロールして
閲覧できるページです。

<https://rihe-publications.hiroshima-u.ac.jp/ronshu/ronshu2/>

 [発行年・集一覧](https://rihe-publications.hiroshima-u.ac.jp/ronshu/) 

<https://rihe-publications.hiroshima-u.ac.jp/ronshu/>

